

検査が陰性なら出社していいのか

専攻医・渡邊昂汰

「インフルエンザもコロナウイルス感染症も陰性ということは、あすから仕事に行っているのでしょうか？」

先日、職場でインフルエンザがはやっている発熱患者さんの診察をした際に、こんな質問がありました。この患者さんが勤めている会社の就業規則では、インフルエンザやコロナウイルス感染症にかかった場合は出勤停止になるそうです。一方、普通の風邪と判断されれば、そのような決まりはありません。「検査で陰性なら出社してよいだろう」と考えるのは無理もないと思います。

◇検査は絶対ではない

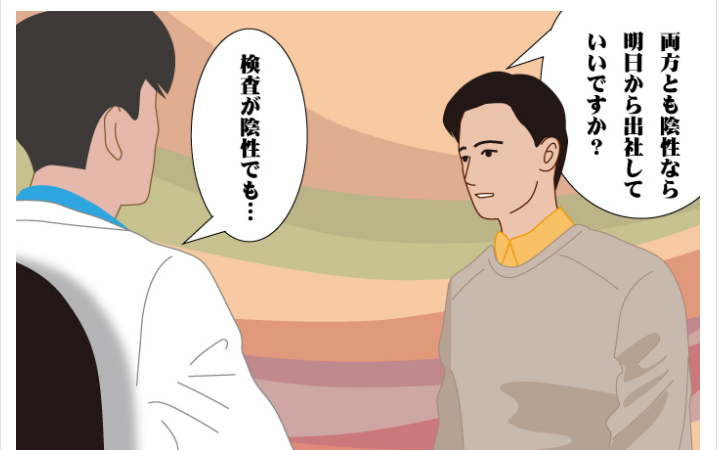
しかし、先ほどの質問には「インフルエンザやコロナウイルス感染症に準じて、お休みしてください」と答えました。両疾患の抗原検査の感度は60%程度とされており、感染者の半分弱は陽性になりません。つまり、検査が陰性でも罹患（りかん）している可能性は拭えないのです。

「そんな確率なら検査をする意義がないのではないか」と思った方は鋭い視点を持っています。実は、私が研修医だった5年前は、インフルエンザ流行期に①突然の発症②38.0度以上の発熱③上気道炎症状④全身倦怠（けんたい）感一などの全身症状の四つがそろえば、検査を行わずにインフルエンザと診断し、診断書の発行や抗ウイルス薬の処方をしていました。

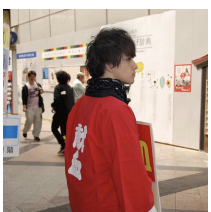
◇コロナ流行で必要に

翌年からコロナウイルス感染症の流行が始まりました。そして現在起きているのが、インフルエンザとの同時流行です。重症化リスクの高い方には、それぞれ投薬治療が必要になるため、これらをよく調べて区別する必要性が出てきました。ここにきて抗原検査を行う意義が高まり、検査せざるを得ない場面が増えたのです。その結果、検査は共に陰性だったが、コロナウイルス感染症やインフルエンザを否定できない患者さんの発生が相次いでいるというのが現状です。

法に基づく明確なルールがないため、従業員の出社可否を判断する立場の方も、迷うケースが多いかと思います。インフルエンザもコロナウイルス感染症も、高齢者が中心ではありますが、重症化や合併症による死亡例がなお報告されており、恐ろしい病気です。コロナ下同様に、症状があったら休ませたり、在宅ワークなどに切り替えたりといった対応をお願いします。（了）



インフルエンザなどは検査しても感染が分かるとは限らない。疑いがあれば慎重な対応を



渡邊昂汰氏

渡邊 昂汰（わたなべ・こーた） 内科専攻医および名古屋市立大学公衆衛生教室研究員。「健康な人がより健康に」をモットーにさまざまな活動をしているが、当の本人は雨の日の頭痛に悩まされている。

(2025/01/27 05:00)

出典元：時事メディカル (<https://medical.jiji.com/>)

- ※ 時事メディカルは株式会社時事通信社が運営する医療ニュースサイトです。
- ※ 当記事の著作権は時事通信社に帰属しております。著作権者の許諾なしに、記事の全部または一部を複製、翻訳、翻案、引用、公衆送信、放送、蓄積、頒布、販売などを行うことはできません。
- ※ 当記事の作成時点までの最も信頼できると判断される各種情報、データに基づいて提供しています。記事を利用した結果、もしくは記事の遅延、中断、誤謬等により被ったとされるいかなる損失、損害についても、朝日生命保険相互会社、時事通信社および外部の情報提供者は一切責任を負いません。

